



縄を絢^なう 町を絢^なう
— 児童館のしめ飾り作り —

宮里 和則

「あ、懐かしいわね……」

「へー、上手なもんね……」

道を通りかかった買い物婦りのおばさんが、一心に縄を絢^なう子どもたちの手元を見ながら声をかけてきます。

「どうぞ一緒にやりませんか」

遠慮がちに座ったおばさんでしたが、作り始め

ると夢中になり「なかなか難しいのね……」と子どもたちとの会話が弾みだします。

「おばあちゃんのうちに持つてくんだ……」

「へえ……えらいわね……」

児童館の前に莫^ご塵^ごを広げて、縄を絢^なう。

もう何年も続いている児童センターの冬の定番イベント、しめ飾り作りです。

子どもたちと町行く人たちとの話を聞いていると、縋ってきたのは『縄』だけでなく、『町の人との関係』もまた縋ってきたのだと、しめ飾りを作りながらしみじみ思います。

縄縋いを伝えたい

しめ飾りと私が出合ったのは、二十年程前のことです。十一月のある日、同僚の指導員の山田さんが藁束を福島から背負ってきました。

自分が子ども時代行っていた縄縋いを、学童保育の子どもたちにも経験させてみたいとの思いからでした。

しかし、縄を縋う作業は今の子どもたちにとってハードルが高く、一年生から三年生までの学童保育の子どもたちにできるだろうかという懸念がありました。

そこで、実験的に作ってみることにしました。

山田さんが学童保育所の隅で一人、おもむろに藁を広げると、何が始まるのだろうかと好奇心いっぱい子どもたちが集まってきました。

パップと藁を手でしごき、水でぬらし、丸太でたたき柔らかくして、足にはさんで二つに分け、手を合わせてよっていきます……。バラバラだった藁があつという間に縄になっていくのを見て、目を丸くする子どもたち。

「やってみる？」と山田さんが子どもたちを振り返りながら呼びかけると、「やりたい」「やりたい」と子どもたちは次々に言いだしました。でもやってみるととても難しい……。てんでこまの一日になりました。

その日、子どもたちが帰った後の話し合いの中で、縄縋いはマンツーマンで教えないととてもできないこと、一日に十人前後に限定して一週間かけて行うことにしよう、と決めました。

しめ飾り作りスタート

さて、十二月「しめ飾りを作ろう」の初日です。予想通りの難しさに、途中で投げ出しそうになる子どもたちも続出です。これは無理かなあと
いう思いもよぎりました。

ところががんばって縄を綱い終えた子が、その縄をぐるりと丸めて水引をつけマツボックリや折鶴を飾ると、とても立派なしめ飾りができあがったのです。その本物感を見て、縄綱いを投げ出しそうになっていた子どもたちの意欲も高まり、次々に立派な作品が生まれました。

「二個目からは自分の力だけで作ろう」と呼びかけると、何回もチャレンジを繰り返し次第に上手な子どもたちも現れてきました。正確に綱い方を覚えるというより、子どもたちは手の動きのリズムを覚えることで上達していくようです。まさに



▲児童館の庭に蔭座を広げ縄を綱う。足で挟んでピンとさせるのがなかなか難しい。

体で覚えるということでしょうか。

このしめ飾りは子どもの家でも大評判で、玄関に飾っていただいたり、親戚の家にお土産に持っていくったり、と大活躍したようです。

藁が無い

その後児童館に異動した私は、ここでもしめ飾り作りを行おうと考えました。しかし、藁が無い！ という事態に遭遇してしまいました。

東京近郊の農家は稲を脱穀機で脱穀後、自動的に藁を細かく切ってしまうようになっており、繙うことができる藁が手に入りにくいのです。

つまり手で刈り取った稲の藁しか使えないということなのです。

前の職場の山田さんの地方でも手に入りにくくなってきました。宅急便で毎年福島から藁を送ってもらっていましたが、迷惑をかけている思いが

ありました。

そこで、体操クラブの人たちに相談してみようということになりました。体操クラブとは児童館の午前中施設利用している高齢者の方々です。町の知恵袋的存在の方々なら、藁を取り寄せる関係をもっているのではないかと考えたのです。

しかし、ほとんどが都会育ちで、藁繙いを経験していても、「子どもたちに教えるのはね……」と遠慮されてしまう方がほとんどでした。

名人武田さんとの出会い

ところが、そんな体操クラブの方々、町の中でお話ししてくれたように、徐々に児童館でしめ飾りを作っているという話が、町に広がっていきました。

「今時、藁打ちをするとところがあるんだねえ

「……」と古くから家に保存されていた藁打ち用の木槌を貸してくれた眼鏡屋さん。

「うちの実家が藁だからえ……」としめ飾りの紙の御幣をたくさん作って持ってきてくれた児童館近所の荻野さん。

ユズリハや松、マツボックリなども町の人からもらうことができたのです。しかし、藁と指導者とはなかなか出会うことができませんでした。

そんなある日、武田さんと出会ったのです。

武田さんは高齢者事業団から派遣された、施設管理員でした。児童館の夜間利用がある夜が勤務日です。物静かでも優しい笑顔を浮かべている武田さんでした。

私はある日、子どもたちが帰った後一人残って児童館のお知らせを書いていました。お知らせを書き終わり一息ついて、何気なく受付に座っている武田さんと話すと、何と武田さんは相模原に畑

と田んぼを借りていて、土日には農業をやっているということがわかったのです。

私らしめ飾りのことや藁が手に入りにくいことなどを話すのを、武田さんはニコニコと聞いていました。そして、自分もしめ飾りは毎年作っていること、近所や知人に配っていることなど話してくれました。

まさに、青い鳥はこんな近くに座っていたのです。

次の日、武田さんが持ってきてくれたしめ飾りは、私たちが作った物とは比べられないほど立派なものでした。

その年の十二月、武田さんはたくさん藁を自転車に乗せやってきました。そして私たちと子どもたちに、しめ飾り作りを教えてくださいました。

縄を綱う横で焚き火をして、できた縄をサツと



▲「去年、おばあちゃんがすごく喜んでくれたんだよ」。苦労しただけ喜びもいっぱい。

くぐらせ、藁のけばを焼いてしまうこと。藁よりもイ草のほうが子どもたちに扱いやすいこと。しめ飾りの由来や、デザインの決まりなどなど、たくさんのことを教えていただきました。

藁をつなぐ。武田さんに教えていただいた技です。縄を綯いながら少しずつ藁を足して綯っていく方法です。この技があればどんな長さの縄も作れます。永遠に縄は伸びていきます。

それはまさに、たくさんの人が加わり、文化が足され、長い伝統の縄が綯われ伸びていく姿を表しているようでもあります。まさにしめ飾り作りの名人でした。

今は故人となった武田さんの教えを受けた子どもたちや大人（私も含め）は、今もこの東京・品川の地で町と縄を綯っているのです。

（東京都品川区児童館職員）